フィリピン政治分析における個人

――Caroline S. Hau, *Elites and Ilustrados in Philippine Culture.*（Ateneo de Manila University Press, 2017）／ Lisandro E. Claudio, *Liberalism and the Postcolony: Thinking the State in 20th-Century Philippines.*（Ateneo de Manila University Press, 2017）――

高木佑輔（たかぎ ゆうすけ）

はじめに
Ⅰ　教育，官僚制と知識人
Ⅱ　社会経済変動と知識人――『フィリピン文化の中のエリートと開明派知識人』――
Ⅲ　学者官僚とリベラリズム――『リベラリズムと植民地後――20 世紀フィリピンの国家を考える――』――
Ⅳ　フィリピン政治分析における個人――知識と政治変化――
結びに代えて

はじめに

フィリピン政治分析に，個人に対する眼差しが戻ってきた。かつて政府で高位を占めた政治家や官僚，民主化運動に深くかかわった活動家たちの自伝や評伝の出版が相次いでいる［Enrile 2012; Almonte 2015; Sicat 2014; Quimpo and Quimpo 2012; Tolosa 2011］。こうした自伝や評伝は，実際の政治過程を知るうえで極めて興味深い。しかしながら，政治学者の多くは，個別の政治アクターよりも制度に注目する制度論を重視する傾向にあり［Abinales 2000; Kasuya 2008; Raquiza 2012; 川中 2001］，必ずしも個人の知見や実践に強い関心を払ってきたわけではない。実際に政治を担ってきた人々の声とどのように向き合えばよいのだろうか。また，個人に注目することは，フィリピン政治理解を深めるうえでどのような意義があるのだろうか。

本稿では，キャロライン・ハウとリサンドロ・クラウディオの研究を手掛かりに，フィリピン政治分析において個人に注目する意義を考えていく［Hau 2017; Claudio 2017］。2 人の著作に共通するのは個人の持つ知識と，そうした個人を取り巻く文脈への配慮である。ハウは，エリートという切り口を設定し，小説などを題材にしつつ，19 世紀から 21 世紀までの 2 世紀以上にわたる政治経済変動と，そのフィリピン社会に対する影響について考察している。彼女は，レシル・モハレスの知識人論に触発されつつ，植民地期の開明派知識人と同時代の政治とのかかわりを再考する。そのうえで，現代の地域研究者と研究対象地域とのかかわりにまで筆を進める。

他方，クラウディオは，個人史を軸に政治史を再構成して，これまでほとんど論じられることのなかったフィリピン政治におけるリベラリズムの潮流を掘り起こした［Claudio 2017］。クラウディオは，植民地官僚を含む官僚の半生を

取り上げ，リベラリズムの具体的な展開を論じている。フィリピン史の大家であるアルフレッド・マッコイがかつて喝破したように，個人史はしばしば文脈を超越した聖人伝になり果てる傾向がある［McCoy 1994, 4］。それに対して，クラウディオはそれぞれの官僚が置かれた政治過程を再構成し，その中で具体的に取りえた行動や立場を明示する。

以下，本稿は4節からなる。第Ⅰ節では両者の議論を研究史の中に位置づけるべく，近年のフィリピン史研究の成果を検討する。過去10年以上にわたり，それまで階級分析が中心であったフィリピン革命分析において，学校での教育や，職場での経験を通じて自立した中間層や知識人層の役割を見直す動きが広まってきた。ハウとクラウディオは，いずれもこうした成果を旺盛に取り込むことで議論に説得力を持たせている。本稿第Ⅱ節では，ハウの議論を導きの糸として，フィリピン政治における知識人の役割について考察を加える。第Ⅲ節では，ハウの議論の影響を考慮しつつ，クラウディオのリベラリズム論を取り上げる。第Ⅳ節では，以上の議論を踏まえ，個人を軸にフィリピン政治を分析することの意義を整理する。最後に，「結びに代えて」では，今後に残された課題について考察する。

Ⅰ　教育，官僚制と知識人

1815年，それまでスペイン領メキシコのアカプルコと同メキシコ副王領のフィリピン群島を結んでいたガレオン貿易が途絶えた。その後，フィリピン群島は，大英帝国を中心とする「海の帝国」に組み込まれていった［白石 2000］。19世紀の間，経済活動の中心は，マニラにおける中継貿易からフィリピン各地で栽培された輸出用換金作物を，マニラ，スアル（ルソン島），イロイロ（パナイ島），セブやサンボアンガ（ミンダナオ島）など各地の自由港から搬出する輸出貿易へと移行した［Legarda 1999］。この時期，スペイン本国は，ナポレオン軍の侵攻，中南米諸国の独立，カルリスタ戦争と呼ばれる数次にわたる内戦など，激動の最中にあった。その結果，スペイン当局は，フィリピンに対する実質的な影響力を失いつつあった。それゆえ，19世紀フィリピン群島の実態は，「スペイン国旗を掲げたアングロ・チャイニーズの植民地」となったといわれる［Hau 2017, 104］。こうした対外経済関係の変化はフィリピン国内の社会経済構造を大きく変えることになった。

フィリピン経済史家ベニト・レガルダは，19世紀には教育と社交において中産階級と呼ぶべき階級が台頭したことを指摘している［Legarda 1999, 213］。社会変動をもたらした重要な要因は教育の普及である。元来，植民地政庁もカトリック教会も，インディオの教育に熱心だったわけではない(注1)。しかし，輸出貿易の増大は，港湾を含む都市における識字層の需要を高めることとなった［Abinales and Amoroso 2017, 93］。そのため，各地で私塾が起こり，教育の機会が増大した。さらに，1863年の教育令により，スペイン当局は村レベルでの初等教育を義務づけた。すべての児童がこの機会を享受したとは考えられないものの，こうした教育の普及なしには，スペイン語で書かれた小説『ノリ・メ・タンヘレ』を端緒とするフィリピン革命の勃発を理解することはできないだろう。

実際，近年進展が著しいフィリピン革命研究

の成果を踏まえると，フィリピン革命を「貧しくて無学な」民衆の反乱とする見方の限界が明らかになる。まず，フィリピン革命で血を流した独立運動カティプーナンの主要構成員について，貧しくて無学な民衆の蜂起という図式は再考を迫られている。例えば，スペイン本国の軍事文書館に保存された新資料を駆使したジム・リチャードソンの研究は，カティプーナンの構成員の多くが，職業を持つ識字層であったことを解明した［Richardson 2013］。さらに，永野も指摘するように，フィリピン革命後期には，当初の指導者の意図を超えた革命運動がフィリピン各地で展開した［Guerrero 2015; 永野 2018］。各地で展開した革命運動の中心は農民であったが，そうした人々は自由よりも連帯を重視する点など，知識人層とは異なる主張を掲げる自立的な運動体であった［Guerrero 2015, 188］。

他方，『ノリ・メ・タンヘレ』の著者ホセ・リサールを含む開明派知識人，イルストラードについても研究が進展してきた。研究の進展を端的に示す仕事として，モハレスの『国民の頭脳』がある［Mojares 2006］。モハレスは，米国植民地期のイルストラードの身の処し方について，同時代にありえた選択肢や当人たちの視座に注目して新しい解釈を提示した。イルストラードは，スペインからの独立を目指すフィリピン革命をけん引したように見えつつ，比米戦争を経てフィリピン革命が暴力的に抑え込まれると，米国植民地支配に協力した。こうした経緯から，イルストラードは革命の裏切り者と見られることが多かった。しかしながら，モハレスは，そうした見方では，実際にイルストラードが行ったことのすべてを説明することはできないとし，代表的イルストラードの生き方を追っている(注2)。モハレスが取り上げた知識人の一例として，フェリペ・カルデロンがいる。カルデロンは，スペイン植民地統治期から，フィリピン人法律家による法律家協会を設立し，フィリピン革命期にはマロロス共和国の憲法作成に協力した。比米戦争を経てマロロス共和国が倒れると，法律家養成のための法律学校を設立した［Mojares 2006, 475］。それのみならず，フィリピン最初の歴史協会を設立し，フィリピン人の歴史の創造にも注力した［Mojares 2006, 476］。また，米国植民地政府は，1908 年にフィリピン大学を設置し，同大学で後の植民地官僚や植民地政治家を養成した。こうした大学を卒業したフィリピン人たちは，学者官僚や議会政治家として，米国植民地統治機構において一定の地位を占めていった。モハレスによれば，「（植民地）国家の外で働いた 19 世紀のプロパガンダ運動家（イルストラード）たちと違い，20 世紀初頭の知識人たちは，国家の中に自らを位置づけて」おり，対立ではなく国民創造を目指していたという（Mojares［2006, 493］。カッコ内は筆者加筆）。

モハレスは，知識人という存在の両義的な立場に注目する［Mojares 2006, 498-500］。特に，植民地教育を受け，植民地政府で働く知識人にとって，植民地政府は日々の糧を提供する職場である一方，自分たち自身がその完全なる内部に位置づけられるわけではない(注3)。モハレスは，植民地勢力にも独立運動にも理解されえない孤独な立場にいることで，知識人たちは自立し，より力強いアイデンティティを持ちうると論じる。それは特にイサベロ・デ・ロス・レイエスのような強烈な個性が象徴している［Mojares 2006, Part III; Anderson 2006］。レイエスは，イルストラードの一人と目されるが，マ

ニラから遠く離れたイロコス地方の出身であり，革命後には労働運動の指導者であり，植民地議会において上院議員でもあった。さらにはフィリピン独立派教会を設立するなど，多方面で活躍した知識人である。このように考えれば，協力か抵抗か，あるいはエリートか民衆かという二元論が単純な見方であることがわかる。

モハレスが米国植民地期の学者官僚に注目したように，独立後にも知識を活用して国家建設に尽力した官僚や政治家たちがいた。独立直後のフィリピン政府は，米国からの一方的な自由貿易条項を含む新植民地主義的な貿易協定を強いられた。こうした中，米国経済界の反対を押し切って中央銀行を設立し，輸入管理と為替管理による輸入代替工業化政策を断行した官僚や政治家がいた。高木は，こうした政策当事者の多くが米国に留学するか，米国植民地政府において経済官僚として勤務しつつ経済を学んだ知識人であったこと，それ故にむしろ米国植民地統治の矛盾に気づき，その是正のために政治運動を展開したことを明らかにした［Takagi 2016］。こうした政策当事者たちは，教育経験や職務経験ゆえに米国の協力者のように見えるものの，実際のところ，米国の様々な既得権益と最前線で渡り合うナショナリストであった。

以上を要すれば，近年の歴史研究は，19 世紀末からの経済変動，それに伴う教育の普及や植民地国家の行政国家化，さらにそれらの政治的含意についての理解を促進してきた。以下では，フィリピン社会を理解するために教育と知識という視角がどのように重要なのか，2 冊の著作を通じて検討する。

Ⅱ　社会経済変動と知識人――『フィリピン文化の中のエリートと開明派知識人』――

ハウは，19 世紀後半の開明派知識人（イルストラード）の描かれ方の再評価を皮切りに，21 世紀の海外在住フィリピン人までを含むエリート及び中間層概念の再検討を行っている。

副題を「祖国と利益」とする序論では，本書全体の分析視角として 2 つの点を整理している。ひとつは，エリートと民衆の間に位置づけられる中間要素（middle element）である。中間要素はエリートとも民衆とも異なるが，それのみが分析対象となることは少ないという。しかしながら，中間要素はフィリピン政治を動態的にとらえるために欠かせない視角である。エリートと民衆という二元論を強調すると，なかなか是正されない経済格差や社会格差に注目することになる。他方，中間要素は経済的な成功や失敗，社会的な上昇や下降の過程にある人々の生き方を浮かび上がらせる。

もうひとつは，イルストラードについて，富裕層ではなく知識人層としての側面を強調している。19 世紀末以来，フィリピンにおいては知識が社会経済的な上昇を遂げるための有力な手段のひとつとなっていた。そうした社会経済変動のひとつの帰結が，19 世紀末，アジアで最初の共和国樹立にまで至ったフィリピン革命であった。フィリピン革命に殉じた革命家の多くが，アメリカ独立戦争，フランス革命などの世界の歴史に刺激を受けていた。そうしたことから，ハウは中間要素や教育を受けた層こそが 19 世紀以来 21 世紀に至るフィリピンの世界性を

表現する存在であるという。

第1章では，スペイン植民地統治の初期にさかのぼって，イルストラードに限らない階層の名称が整理されている。そのうえで，エリートと民衆という二分法を批判し，民衆層以外の社会階層の多様性を財産，教育を含む社会資本やエスニシティに注目して論じている。また，イルストラードという言葉がスペイン植民地統治時代に一般的ではなかったことを強調し，イルストラードという語彙の登場自体が19世紀末の社会変動の証左であることを示している。

第2章から第4章までは，小説を題材にしてエリートについての表象を検討している。その際に注目するのはフィリピン人ナショナリティの混交性（hybridity）とその限界，また遍歴する知識人の姿である。

混交性とその限界を象徴するのが，「国民の芸術家」ニック・ホアキンである(注4)。フィリピンを代表する作家の一人であるホアキンの名声の礎は，消えゆくスペイン文化を英語で表現したことであったという。そのうえで，彼が香港をある小説の舞台にしたことに注目する。香港は，イルストラードの多くが洋行する際の寄港地であり，フィリピン革命のさなか，革命の後半に台頭し，革命を主導したエミリオ・アギナルドの亡命先でもあった。この点は，ホアキンの植民地理解を反映している。というのも，ホアキンは，スペインによる植民地化が，フィリピンと呼ばれる地に西洋化とアジア化の2つを同時にもたらしたととらえているためである［Hau 2017, 102］。ただし，米国植民地統治は，19世紀に培われたフィリピンの混交性を失わせたという。まず，英語一辺倒の教育と，実学重視の米国流教育により，西欧との知的つながりが途切れた。また，経済的にも米国経済とのつながりが東アジア間貿易を圧倒するようになった［永野 2003; Hau 2017, 110-111］。

他方，遍歴する知識人については，時代が下り，20世紀後半の在外フィリピン人（OFW）を扱った小説『イルストラード』を題材として論じている。複数の物語が同時並行的に描かれる同書の批判的検討を踏まえ，教育と改革という2つのキーワードが吟味される。これらは，教育を受けたものが祖国の改革に尽くすという期待とともに語られ，帰国せずにとどまる事態を頭脳流出とみなす議論へとつながる［Hau 2017, 153］。OFWの両義的な立場についてのハウの論述には，第Ⅰ節で紹介したモハレスによる植民地官僚の両義性についての分析と通じるものを読み取ることができる。

これらの前半の3章から浮かび上がるのは，特定の鋳型にはまったエリート像を拒否し，むしろ混交性と遍歴の中で決断する個人に対するハウ自身の共感であろう。以上に続く第5章と第6章は，実際の政治経済分析である。一見すると，それ以前の章とのつながりが弱いようにも思えるが，いずれの章も，近視眼的なエリートが牛耳るフィリピン政治という図式や，経済的な利潤を重視する裕福な中国系フィリピン人という図式を相対化する試みであり，しばしば構造的に論じられる政治経済現象を，より動態的に解釈しようとする点で，それ以前の章からの問題意識を発展させたものといえる。

まず，第5章では，フェルディナンド・マルコス政権（1965～86年）とその後の民主化についての分析を中心に据えてフィリピン政治経済論を再検討する。再検討の要点は2つある。第1に，寡頭支配構造を強調する論者が非歴史的

に語りがちなフィリピン政治経済論に歴史を取り戻そうとする。例えば，マルコスについて，植民地期以来の寡頭支配層というよりも，戦後に台頭した政治的新人類（new men）である点を強調している。また，マルコス大統領による経済運営については，1979 年ごろに潮目が変わったことを指摘し，1981 年のハイメ・オンピンによる『アジアン・ウォールストリート・ジャーナル』誌上での告発がクローニー資本主義批判に火をつけたと論じる［Hau 2017, 197］。

第 2 の要点は，冷戦やグローバル化といった国際関係を意識すること，そうした状況の中に置かれた他のアジア諸国との比較を行うことにある。例えば，1979 年以降のフィリピンにおける経済危機は，当時，米国連邦準備制度理事会理事長であったポール・ヴォルカーによる金利引き上げに端を発していた点を強調している。実際に，1982 年には国際金利の急上昇からメキシコは債務不履行に追い込まれた。ハウは，フィリピンにおいても債務繰り延べ交渉が難航し，経済危機から政治危機に至ったことを，韓国が日本からの円借款で金融危機を切り抜けたことと比較しつつ論じる。

第 6 章は，特にグロリア・マカパガル・アロヨ政権期（2001～10 年）を中心に比中関係を考察している。考察の中心は，アロヨ大統領の親族や中国の通信大手 ZTE 社を巻き込んだ疑獄である。本章の要点は，レント・シーキングを比中経済にまつわる本質的な特徴だと主張することではない。むしろ，疑獄事件が生じる背景には政治権力闘争がある点に注目している［Hau 2017, 242］。実際，この疑獄事件は，アロヨ大統領とジョー・デベネシア下院議長との政治権力闘争を抜きには理解できない。また，習近平時代の中国についても，政権が汚職撲滅を政治的に利用している点に言及している。このことは，レント・シーキングの問題を，中国人／中国系という国籍やエスニシティの問題と切り離そうとする著者の立場を反映している。

第 7 章「海外在住フィリピン人知識人とフィリピン系外国人」は，知識人としての研究者の在り方を論じている。第 6 章までの議論を踏まえ，現在のフィリピン地域研究の特徴をあぶり出す試みでもある。話の始まりは，フィリピン史家レイナルド・イレートによるフィリピン政治研究に対するオリエンタリズム批判である。イレートによれば，主に米国を中心になされてきたフィリピン政治研究では，フィリピン政治を他者化する傾向が顕著であり，それはエドワード・サイードが欧米の中東研究を批判したオリエンタリズムと類似の傾向があるという。イレートによる批判は，批判された研究者のほとんどが米国人や米国在住の研究者であったことから，あたかもフィリピン研究はフィリピン人によってなされるべきであるとの主張かのように誤解された。ただし，ハウも指摘するように，イレート自身は別の論文でアゴンシルリョや，彼と同じく民族主義歴史家として位置づけられることの多いレナート・コンスタンティーノを明確に批判しているように，フィリピン人研究者によるフィリピン研究を礼賛しているわけでは決してない。

ハウの関心は，思考する主体としての知識人のあるべき立場をめぐる論争ではなく，問いを立て，読者に語り掛ける知識人の営為にある。そのため，サイードのオリエンタリズム論，特に移民知識人に対する論争を紹介しつつも，移民知識人と祖国にとどまる知識人の優劣につい

て論じることはない。そうではなく，エリートと人々について考え，中間要素としての知識人の役割に注目している。問われるべきは知識人の人種や国籍といった属性ではなく，どのような読者に語り掛けるのかという問題となる。フィリピン地域研究は，フィリピン人，外国人，フィリピン系外国人と海外在住フィリピン人らすべてに開かれているとする。こうして，誰のために書いているのか，誰に向けて書いているのかを自問しつつフィリピン人知識人はフィリピンについて書き続けることになるだろうという。

Ⅲ　学者官僚とリベラリズム――『リベラリズムと植民地後――20 世紀フィリピンの国家を考える――』――

クラウディオは，2014 年 9 月から 2 年間，京都大学東南アジア研究所に客員研究員として在籍し，ハウをはじめとする研究者と交流しつつ，本書を書き上げた。本書では，フィリピンにおけるリベラリズムの伝統を再評価する。第 1 章では，最初に，クラウディオのリベラリズムについての理解が提示される。リベラリズム研究でしばしば引用されるジョン・グレイの議論を介して，アリストテレスの市民的価値や政治参加をリベラリズムに内在するものととらえる立場を重視する。そのうえで，植民地支配後の民主主義への漸次的移行を支えたのはリベラリズムに裏打ちされた官僚や国家建設者たちであるとする。クラウディオ自身の表現によれば，「リベラリズムは官僚的で，退屈で単調な過程になった」ということになる［Claudio 2017, 7］。ただし，これは彼一流の皮肉であり，彼の議論の要点は，リベラリズムは，右派と左派のラディカルな主張を退け，「包容力のある中間地点」を生み出すとする点にある［Claudio 2017, 7］。

前節で紹介したハウの中間要素に対する評価を思い出せば，クラウディオが 19 世紀フィリピンのイルストラードとリベラリズムを結びつけることは自然に思える。実際，ハウの仕事を参考にしつつ，イルストラードのリベラリズムについて，ルールに基づく国民国家建設の欲求，当時のフィリピンを実質的に支配していた司祭に対する批判と進歩的な教育に対する支持の 3 つをその特徴として整理している［Claudio 2017, 9］。上述のモハレスの議論の影響の色濃いこの解釈に沿えば，フィリピン革命は比米戦争で終わるのではなく，植民地国家建設へとつながっていくこととなる。なお，イルストラードや中間要素に注目することで，19 世紀のフィリピン人と，同時代の西欧の思想家との共振を強調している点にも触れておきたい。フィリピン一国史を相対化しようとするこの姿勢は，ハウの地域におけるフィリピンという視座とも共鳴しており，第 1 章以降の本論においてもしばしば見出される本書の通奏低音となっている。

第 1 章「カミリオ・オシアスと国際主義ナショナリスト」は，教育行政の専門家であり，植民地議会の政治家に転身したオシアスを取り上げる。彼を取り上げる理由は 2 つある。第 1 の理由は，先行研究において強調されてきたフィリピン政治理解を相対化することである。クラウディオは，アゴンシルリョとコンスタンティーノに代表されるエリートと民衆の二元論的理解を，彼らが勤務したフィリピン大学の地名から「ディリマン・コンセンサス」と呼び，その問題点を指摘し，本書のフィリピン史理解に対する

貢献として強調している。コンスタンティーノは，その有名なフィリピン教育批判「フィリピン人の受けたえせ教育」において，米国流の教育システムがフィリピン人の伝統を軽視し，米国流の生活様式をフィリピン社会に根付かせたと論じた。米国植民地期の代表的教育官僚であったオシアスの思想を再評価することで，ディリマン・コンセンサスとは異なるフィリピン史の可能性を開こうという意思が読み取れる。

オシアスを取り上げる第2の，より積極的な理由は，オシアスの思想を手掛かりに，フィリピン主義，国際主義とデューイ流のプラグマティズムという3つの思想潮流を描くためである。クラウディオは，フィリピン主義について，モハレスの議論を参考にしながら，米国からの自立を主張しつつ，植民地統治のルールそのものは否定しない文化的ナショナリズムと定義している［Claudio 2017, 28］。彼によれば，この定義に基づきつつ，将来の独立という米国の約束を踏まえながらフィリピン独立を訴えるオシアスこそ，フィリピン主義の中心的唱道者であった。次に議論されるのが，国際主義ナショナリストの側面である。この概念については，ヨーロッパ史家マーク・マゾワーによるイタリア人政治家ジュセッペ・マッツィーニ理解を参考にしている［Mazower 2012］。マゾワーは，マッツィーニが民主的な国民国家からなる国際社会は平和であると信じていた点を重視し，マッツィーニにおいて国際主義とナショナリズムは両立していたとする。これにヒントを得て，クラウディオはオシアスを国際主義ナショナリストであったと論じる。最後のプラグマティズムについては米国留学の経験に触れている。オシアスはジョン・デューイが勤務していたコロンビア大学に留学しており，後年，デューイ教授の学生であったことを誇りに思うと述懐している［Claudio 2017, 32］。

第2章「サルバドール・アラネタとフィリピンのニューディール」は，1950年代に複数の官庁で長官職を歴任した経済学者のアラネタを取り上げている。アラネタの主張や立場については，拙稿［Takagi 2016］を含めていくつかの研究がある。そうした研究では，アラネタの反緊縮財政の姿勢や輸出に対する積極姿勢が評価される一方，植民地経済の遺制となっていた砂糖産業を代表する財界人と協力関係にあった点が強調されてきた。当時の中央銀行総裁ミゲル・クアデルノは，輸入代替工業化による経済的脱植民地化を目指しており，アラネタとはたびたび衝突し，最終的にアラネタは政府を去った。クラウディオは，反緊縮の姿勢や完全雇用を目指す姿勢を評価し，アラネタを，当時のフィリピンを代表するケインジアンと評価する。こうした姿勢は，クアデルノに代表される財政保守派と，政府に対する武装闘争を掲げた草の根運動との中間に位置しており，米国のリベラルが主張するような福祉国家建設に向かう可能性をも内包していたとする。

第3章「カルロス・P・ロムロと反共第三世界主義」は，国連総会議長やフィリピンの外務大臣を長年にわたって務めたロムロを取り上げている。ロムロについては，バンドン会議における中国に対する批判的な発言や，インド代表だったネルー首相との確執などから，米国に隷従した人物と評されることがある。それに対し，クラウディオは，ロムロは反共主義に基づく第三世界主義を主張したのであって，対米従属外

交を主張していたわけではないとする。また，反共主義の淵源にはロムロなりのアジア主義があったとする。その例証として，ロムロが，米国の南ベトナムに対する支援を批判し，ホーチミンを高く評価していたことなどを指摘する［Claudio 2017, 93-94］。また，米国におけるマッカーシズムを批判していたことなども，ロムロのリベラリズムを示すという。クラウディオいわく，ロムロはオシアスと同じく，深く西洋世界を知ることにより，リベラリズムの観点から実際の西洋社会の問題を批判する視座を獲得していた。こうした姿勢は，後年フィリピン大学学長として学生運動に対して寛容な姿勢を取ったことなどにも表れているという。

第4章「サルバドール・P・ロペスと自由の空間」では，ロムロの側近として国連外交を中心に活躍し，その後はロムロの後任としてフィリピン大学学長となったロペスを取り上げている。クラウディオは，ロペスの思想を，哲学者マイケル・サンデルの論じる政治共同体への参加を通じた自由や，アリストテレス流の政治的動物としての人間という思想の中に位置づける。ロペスが学長に就任したのは1969年で，1970年にはフィリピンの学生運動史に残る「第1四半期の嵐」に対峙することとなった(注5)。既にフェルディナンド・マルコス大統領による政治的圧力は陰に陽にロペス学長に及んでいたものの，ロペスは学生運動の指導者との対話を続け，流血を回避した。その後，特に1972年の戒厳令施行後にはマルコス大統領との関係が冷却化し，1975年にはフィリピン大学学長の職を離れた。学長退任後もロペスは沈黙することはなく，戒厳令体制に批判的なコラムをカトリック教会系の雑誌『ヴェリタス』や『Mr. & Ms.』などに執筆した。

結論「グローバルな理念としての植民地後のリベラリズム」ではこれまでの議論をまとめており，後書きでは著者自身の母方の祖母リタ・エストラーダを回想とともに論じている。いずれの章も，フィリピン社会におけるリベラルの足跡を探る著者の姿勢を切り取っている。ハウの議論を踏まえれば，20世紀初頭のフィリピン政治史における中間要素の事例分析と位置づけることもできるだろう。

Ⅳ　フィリピン政治分析における個人
――知識と政治変化――

ハウとクラウディオの仕事を踏まえ，個人に注目することの意義を考えてみたい。冒頭で触れたように，既存のフィリピン政治研究では，構造や制度を重視してきた。換言すれば，既存の構造や制度から，個々のアクターの利益や期待を想定してきたといえる。一方，個人に注目する研究は，必ずしも既存の構造や制度に囚われない発想を持つ個人に注目してきた。なぜ，そのような個人が見出せるのだろうか。

ハウやクラウディオの研究に影響を与えたモハレスの仕事に立ち戻ると，変化につながりうる個人の誕生にとって，教育が重要であったことがわかる。モハレスが言うように，知識人は既存の教育制度の産物であるが，教育は必ずしも既存の利益構造を再生産するだけのものではない。むしろ個々人に現状に対する疑問を抱かせる契機ともなるはずである。『ノリ・メ・タンヘレ』の著者ホセ・リサールの例が示すように，現状に疑問を抱き，行動を起こす知識人がフィリピン史の断面を切り開いてきた。ハウが示し

た通り，中間要素の形成はフィリピンの社会経済変動を確かに反映しており，その中で，公式，非公式に教育を受けた層の中から，現状に疑問を抱き，実際に改革に立ち上がってきた人々がいる。以上のことは，2つの意味で研究の地平を広げたといえる。

第1に，個人の発想や理念についての理解が広まった。モハレス，ハウとクラウディオが示したように，フィリピン政治史を振り返れば，啓蒙思想，国民主義やリベラリズムなどの多様な思想の存在が浮かび上がる。フィリピン政治分析においては，しばしば社会経済格差が問題になり，エリートと民衆，あるいは首都マニラと地方という二項対立が強調されてきた。社会経済構造に注目するのではなく，そうした構造を批判的に認識する個人に注目することによって，構造に還元されない多様な思想の存在を認識することができる。そして批判的な現状分析とあるべき社会についての構想やそれを支える思想の存在を認識することを通じて，政治運動の組織化や政策立案をめぐる政治的ダイナミクスをより的確に分析することができるだろう。

第2に重要なのは，個人の政治的役割を考えることが，制度改革を通じたフィリピン政治の変化を説明するヒントになるという点であろう。クラウディオが注目するように，「退屈な」制度構築を担う実務家たちが，フィリピン政治のひだを織り成してきた側面は無視できない。彼の叙述に明らかなように，個々人が築いた人間関係や，時々の時代状況からなる文脈を再構成し，その中で取りえた選択肢を整理することで，フィリピン政治分析に個人の役割を取り戻すことができるのではないだろうか。

比較政治学の知見に引きつければ，2つの著作とも，言説的制度論と親和性が高い［Béland and Cox 2011］。それ以外の制度論者が，制度を分析の際の説明変数とするのに対し，言説的制度論者は，制度を分析上の従属変数として，思想をある制度の存在を説明する独立変数としてそれぞれ位置づける(注6)。制度を従属変数にすることにより，個人の行為の制約要因としての既存の制度ではなく，個人の行為が生み出す制度化や制度改革の過程を考察することができる。換言すれば，多くの制度論者が制度の継続を重視するのに対し，言説的制度論者は制度の変化をとらえようとする。

以上を要するに，既存のフィリピン政治研究が構造や制度からフィリピン政治の特徴を説明しようとしてきたのに対し，個人に注目する視角は，思想や理念から制度化，制度化を通じた構造の変化を議論することを可能にするだろう。

結びに代えて

本稿では，個人の役割に注目するハウやクラウディオの研究をヒントにして，個人に注目したフィリピン政治分析の可能性を検討した。いずれの研究も，単なる個人への注目ではなく，教育を受け，フィリピン社会の矛盾を批判的に見つめる知識人の存在と，そうした知識人が実際にとった行動に注目した。こうした研究は，エリートと大衆という二元論ではすくい取れないフィリピン政治の断面を描き出した。これらの研究を踏まえた今後の課題を提示して本稿を終える。

本稿では取り上げていないが，フィリピン政治研究で重視されてきた研究対象に，革命運動，

社会運動や市民運動などの政治運動がある［高木 2018, 71］。この分野においても，エリート対民衆という二項対立的な図式が相対化されてきた。民衆を代弁すると称する左派運動内部の亀裂を描いた「競合する民主主義」論［Quimpo 2008］や，市民運動は民衆の声を代弁しておらず，むしろ民衆の側には「反市民の政治」があるという日下の議論がある［日下 2013］。こうした研究動向と，本稿で取り上げた研究潮流を踏まえると，フィリピン政治における主要な対立軸をどうとらえるのか，という問題が浮かび上がる。

本稿で論じたように，個人に注目する議論は現状を変えようとする人々が生み出す政治のダイナミクスを切り取る視角を提供する。既存の統治機構の枠組みの中で制度改革を試みる個人と，政治運動にかかわる個人との関係性を視野に入れた研究を構想できれば，よりダイナミックなフィリピン政治理解に到達できると考える。

（注 1）　スペイン植民地統治下，人種に基づく住民の区別がなされていた。インディオは，スペイン人との婚姻により，スペイン人に地位を変えることが許されていた［Hau 2017, 50］。

（注 2）　なお，イルストラードは革命を批判した改革主義者であるという見方自体が米国植民地当局の作為の結果であったことを喝破した著作として［Quibuyen 1999］がある（永野［2016］も参照）。

（注 3）　アンダーソンは，この葛藤を背負ったクレオールの先駆者たちがナショナリズムを生み出したと論じた［Anderson 1991］。

（注 4）　ホアキンは 20 世紀フィリピンを代表する作家の一人であり，その功績をたたえ，国民の芸術家（National Artist）の称号を贈られている。ハウが取り上げている『二つのヘソを持った女』は日本語にも翻訳され，めこんから出版された［ホワキン 1988］。ホワキン［1988］では著者名をホワキンとしているが，本稿ではホアキンと表記する。

（注 5）　第 1 四半期の嵐とは，1969 年のマルコス大統領再選以降に盛り上がった学生を中心とする政治運動である。学生運動家のほか，1968 年に組織化されたばかりのフィリピン共産党や，野党自由党などの支援もあった［Thompson 1996, 37-42］。

（注 6）　言説的制度論では思想よりもアイディアという表現が多く使われるが，煩雑さを避け，本節の議論の流れに合わせるために，思想という表現に統一する。

文献リスト

〈日本語文献〉

川中豪 2001.「フィリピン地方政治研究における国家中心的アプローチの展開」『アジア経済』42（2）　45-58.

日下渉 2013.『反市民の政治学――フィリピンの民主主義と道徳――』法政大学出版局.

白石隆 2000.『海の帝国――アジアをどう考えるか――』中央公論新社.

高木佑輔 2018.「21 世紀のフィリピン政治研究――構造から制度，制度から人，人から地域へ――」『東南アジア――歴史と文化――』47　68-79.

永野善子 2003.『フィリピン銀行史研究――植民地体制と金融――』御茶の水書房.

――― 2016.『日本／フィリピン歴史対話の試み――グローバル化時代のなかで――』御茶の水書房.

――― 編 2018.『帝国とナショナリズムの言説空間――国際比較と相互連携――』御茶の水書房.

ホワキン，ニック 1988.『二つのヘソを持った女』山本まつよ訳　めこん.

〈英語文献〉

Abinales, Patricio N. 2000. *Making Mindanao: Cotabato and Davao in the Formation of the Philippine Nation-State*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Abinales, Patricio N. and Donna J. Amoroso 2017. *State and Society in the Philippines*. Rev. ed. Lanham: Rowman & Littlefield.

Almonte, Jose T. 2015. *Endless Journey: A Memoir*. Quezon City: Cleverheads Publishing.

Anderson, Benedict 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Rev. ed. London: Verso.

——— 2006. *Under Three Flags: Anarchism and the Anti-Colonial Imagination*. Pasig: Anvil Publishing.

Béland, Daniel and Robert Henry Cox eds. 2011. *Ideas and Politics in Social Science Research*. Oxford: Oxford University Press.

Claudio, Lisandro E. 2017. *Liberalism and the Postcolony: Thinking the State in 20th-Century Philippines*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Enrile, Juan Ponce 2012. *Juan Ponce Enrile: A Memoir*. Quezon City: ABS-CBN Publishing.

Guerrero, Milagros Camayon 2015. *Luzon at War: Contradictions in Philippine Society, 1898-1902*. Mandaluyong City: Anvil Publishing.

Hau, Caroline S. 2017. *Elites and Ilustrados in Philippine Culture*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Kasuya, Yuko 2008. *Presidential Bandwagon: Parties and Party Systems in the Philippines*. Tokyo: Keio University Press.

Legarda, Benito J. 1999. *After the Galleons: Foreign Trade, Economic Change and Entrepreneurship in the Nineteenth-Century Philippines*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Mazower, Mark 2012. *Governing the World: The History of an Idea*. New York: Penguin Press.

McCoy, Alfred W. ed. 1994. *An Anarchy of Families: State and Family in the Philippines*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Mojares, Resil B. 2006. *Brains of the Nation: Pedro Paterno, T.H. Pardo de Tavera, Isabelo de los Reyes and the Production of Modern Knowledge*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Quibuyen, Floro C. 1999. *A Nation Aborted: Rizal, American Hegemony, and Philippine Nationalism*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Quimpo, Nathan Gilbert 2008. *Contested Democracy and the Left in the Philippines after Marcos*. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies.

Quimpo, Susan F. and Nathan Gilbert Quimpo 2012. *Subversive Lives: A Family Memoir of the Marcos Years*. Pasig: Anvil Publishing.

Raquiza, Antoinette R. 2012. *State Structure, Policy Formation, and Economic Development in Southeast Asia: The Political Economy of Thailand and the Philippines*. New York: Routledge.

Richardson, Jim 2013. *The Light of Liberty: Documents and Studies on the Katipunan, 1892-1897*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Sicat, Gerardo P. 2014. *Cesar Virata: Life and Times; Through Four Decades of Philippine Economic History*. Quezon City: University of the Philippines Press.

Takagi, Yusuke 2016. *Central Banking as State Building: Policymakers and Their Nationalism in the Philippines, 1933-1964*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Thompson, Mark R. 1996. *The Anti-Marcos Struggle: Personalistic Rule and Democratic Transition in the Philippines*. Quezon City: New Day Publishers.

Tolosa, Benjamin T. ed. 2011. *Socdem: Filipino Social Democracy in a Time of Turmoil and Transition, 1965-1995*. Manila: Friedrich-Ebert-Stiftung.

（政策研究大学院大学助教授，2018 年 7 月 11 日レフェリーの審査を経て掲載決定）